

令和元年5月30日現在

機関番号：84601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26284126

研究課題名(和文) 日本中世における葬送墓制の総括的研究

研究課題名(英文) Comprehensive studies of the funeral and grave system during the Medieval Period in Japan

研究代表者

狭川 真一 (Sagawa, Shinichi)

公益財団法人元興寺文化財研究所・研究部・研究員

研究者番号：30321946

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,900,000円

研究成果の概要(和文)：3つのテーマを掲げて研究に着手した。仏塔と墓の関係では木造宝篋印塔(1318年銘)を題材にし、関連資料も踏まえつつ、13～14cの墓上には石造をはじめ、各種の標識が建立されていたことを明らかにした。その造営の担い手は武士層と考えた。納骨信仰遺跡では河内長野市金剛寺で発見された木製小五輪塔の調査結果と元興寺での納骨遺物の有り方の比較から、多彩な納骨形態の存在を指摘した。また高野山における納骨では退化した一石五輪塔(17～18c)の調査を通じて、子院にまで及んだ信仰の一端を明らかにできた。中世墓の破壊では各地に残る一石五輪塔や小石仏の分析を通じて、中世墓の終焉期の様相を明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

考古学の中でも立ち遅れていた中世墓研究について、過去の研究成果とあわせて一定の到達点に近づくことができた。特に今回の研究では未知の資料の発見とその調査成果を踏まえて研究を進展できたことは大きく、これまでにない所見を提示することができた。

また、各地に残る一石五輪塔や小石仏の分布傾向、年代把握などの基礎情報の収集とそれを踏まえた総括的な研究を実施できたことから、中世墓の終焉というテーマから発展して、近世墓の成立背景や移行期の様相を把握できるなど、大きな成果を得ることができた。このことは考古学的な成果にとどまらず、中世史、近世史の研究へも大きく寄与できるものになったと考えている。

研究成果の概要(英文)：We undertook the research on three themes. (1) Regarding the relationship between pagoda and tomb, we have clarified that stone works and various signs were built on the tombs of 13th-14th century and assumed that the warrior class was the bearer of the construction based on the wooden houkyouin-tou (with a signature of 1318). (2) Regarding the Cineration ruins, we have pointed out the existence of various cinerary forms based on the comparison between the results of the survey of wooden small-scale gorin-to discovered at Kongoji in Kawachinagano City and the state of cinerary relics at Gangoji. Furthermore, we could clarify one part of the faith in the sub-temple through the survey of gorin-to made of one stone (17c-18c) degenerated in the case of Cineration in Kouyasan. (3) With regard to the destruction of the medieval tombs, we could clarify the aspect of end of the medieval tomb through the analysis of the remaining small Buddhist image and gorin-to made of one stone.

研究分野：考古学

キーワード：墳墓 仏塔 納骨 霊場 墓の破壊 中世墓の終焉 石造物

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、平成 15～18 年度に特定領域研究『中世資料学の総合的研究』のなかの「墳墓および葬送墓制研究の観点からみた中世」研究班の研究代表者を務め、さらに平成 19 年度に継続した同題の特別研究促進費を活用し、日本全国の考古学的に調査された中世墓の資料を網羅的に集成した『中世墓資料集成』(全 10 巻 14 冊)を完成させ、それに伴う地域での研究会を計 9 回実施、さらに平成 19 年度にはその集大成の報告会を開催した。平成 20 年度にはその成果を『日本の中世墓』(高志書院刊、2009 年)として刊行した。さらに、上記の集成に伴う研究会とは別に「中世墓を考える会」を開催して個別の課題を検討する研究会を実施し、その結果を『墓と葬送の中世』(高志書院刊、2007 年)として出版し成果を公開した。ここでは、「遺棄葬(放置葬)」「中世の火葬」「石塔の受容」の 3 本にテーマを絞って検討した。

平成 21～25 年度には基盤研究(B)「日本中世の葬送墓制に関する発展的研究」を採択され、ここでは「火葬」「火葬人骨」「石塔と墓」「副葬品」「墳墓堂」の 5 つのテーマを設定して、個別に研究を重ねるといった手法をとりつつ、中世葬送墓制研究会を立ち上げて各テーマについて研究会を開催し、研究内容を深めることに成功した。

この約 10 年間の成果として中世墓研究が幅広く周知され、課題を追及する研究者も増加したと言え、当該研究の成果は広く根付いていると考えられるようになった。

## 2. 研究の目的

上記の研究成果を踏まえた形で、本研究では「(A)仏塔と墓の関係」「(B)納骨信仰遺跡」「(C)中世墓の破壊」という 3 つのテーマを掲げて、新しい研究に臨むこととした。

墓の造営が浸透する背景には様々な要因が考えられるが、今回提示した 3 つの視点を詳細に研究することで、地上標識としての仏塔研究から墓の景観的な変遷とそれを形成した当時の人々の精神文化の把握、納骨霊場研究からは死後の世界観や宗教文化の変遷、墓の破壊行為にみる標識と死者霊との関係性が理解できると考えた。

これらの成果を十分に踏まえ、融合することで、通史的に日本の中世葬送墓制を把握する。中世墓研究を通じて、それぞれの時代に生きた人々の死後の世界観や宗教観を明らかにすることができるとともに、日本の歴史の中に確固たる位置付けを行うという目的をもって研究に着手した。

## 3. 研究の方法

研究目的に掲げた 3 つのテーマを互いにリンクさせながら、且つ研究分野も考古学だけでなく、文献研究や民俗学研究、美術史研究、さらにテーマによっては自然科学的研究などを取り込みながら、中世葬送墓制研究を進展させるよう心掛けた。

具体的には各研究課題に対応した研究会を開催し、口頭発表だけでなくできるだけ発表資料も充実したものとし、研究会への参加が叶わなかった研究者へも成果の公開を行うという方法で臨むこととした。また、関連資料の調査で得た成果も速やかに整理、報告するとともに、成果の公開を行うことは言うまでもない。

上記の事項を積極的に推進するにあたり、これまでに構築した人脈を大いに活かして調査研究を進めるとともに、若手の研究者に研究発表者として登壇する機会を与えるなど、すべてのテーマに可能な限り世代を超え、且つ全国的に視野を広げて進める。

#### 4．研究成果

まず課題別に整理する。

##### (A) 仏塔と墓の関係

関連資料の収集作業中に偶然にも新資料の発見に行きついた。いわき市金光寺木造宝篋印塔 2 基がそれである。課題の主体となる 13・14 世紀を考えるうえで最適な「文保二年（1318）」の年号を有していたこともあり、また現在は寺の本堂内で安置されるものの資料の状態から当初は直接地上に置かれ、塔身部分に納骨を行っていた形跡があることも判明した。こうした条件は、ここに掲げた課題に見事に一致するものであり、この塔を詳細に調査することは課題の克服に有効であると判断した。

この塔の調査成果は『金光寺木造宝篋印塔調査報告書』として平成 30 年度に書籍型式で刊行し、関係機関および関係者へ配布するとともに、同年開催の研究報告会で詳細を報告した。

さて、墓上に石塔を建立することは 12 世紀末に天皇が木造の多宝塔や三重塔の中に埋葬されたことで仏塔と墓が結びつき、その後に高僧の墓所にも採用されるようになったと考えられる。ただ高僧の遺骨は舍利と呼ばれる場合もあったので、まだ仏塔は舍利との関係が深いと理解できる。しかし 13 世紀後期頃になると、各地の武士層も墳墓堂から石塔墓へ移行していくことが明らかとなっており、個々の仏塔が墓の標識として一般化するようになったと言えるだろう。それらの代表格は石造の五輪塔であるが、上記のような木造の宝篋印塔も墓塔となり得ることが判明したため、地下遺構として検出される中世墓で、墓上に石塔を保有しないものでも安易に標識無しとは言えないことを示すことができた。やはり基本的には何らかの標識を置いていたと見るのが妥当と考えられる。

このように、13 世紀後期から 14 世紀中頃までに墓上へ仏塔を建立したのは、当時の有力者層に限られたものとみられる。

これ以後は石塔造営階層も低層化するようで、石塔も小型化、量産化の道を歩むこととなる。ただ、徐々に石塔と墓との関係が明白でなくなることもまた事実であり、それらの位置付けを研究することは急務であると考えられた。この課題は、(C) 中世墓の破壊の項目で扱うことが適当と判断したので後述する。

なお、この課題に関する中間成果報告を兼ねて、平成 27 年度秋に元興寺法輪館で開催の秋季特別展にて「小仏塔の世界」と題する展覧会を開催し、関連資料を収集し一同に会した。上記の金光寺木造宝篋印塔はこの機会に借用し、研究所に運び込んで詳細な調査・分析を行う機会とさせていただいた。また、同名の簡易な図録の作成も行った。

##### (B) 納骨信仰遺跡

高野山奥之院における納骨信仰は早くから研究が行われてきたが、考古学的な所見は遅れていたと言える。そこで出土資料の一部を借用し未調査資料について、実測するなどの作業を行った。また全国的な納骨霊場研究の現状を把握するために『季刊考古学』(134 号、雄山閣)誌上を活用して、各地の研究者に呼びかけて一冊に編む機会を得た。このことで考古学的な研究の現状は把握できたが、課題もまた多く上がってきた。

その作業のなかで、大阪府河内長野市金剛寺に納骨のための五輪塔ではないかと思われるものが未調査の状態で存在していることを知らされ、予備調査を行ったところ、当該研究に有効な情報をもたらすと判断したため、金剛寺様のご協力のもと基礎的な調査を実施させていただくこととした。その結果、元興寺などに奉納されている中世の納骨五輪小塔とは異なり、形が大きく 3 タイプほどしかないことや、納骨のためとみられる奉籠孔の規

模や形状が類似することなど共通性の高いものであった。さらに勤務地にX線CTが導入されたことから、これを活用した関連調査も並行して実施することができた。その結果、納骨用の小五輪塔であることは間違いないところであるが、不特定多数の方の遺骨を奉安するものではなく、おそらく一人の方の遺骨を何らかの事情で粉碎し、多数が結縁して多数の小塔を造営し、そこに遺骨の小片と陀羅尼を書写して奉安したものであると考えられた。多数作善と納骨信仰が重なったあらたな形態を見出すことができ、年代も中世に遡るものと判断できたことは大きい成果となった。

高野山奥之院や元興寺は不特定の方の納骨を受け入れることで発展したものであるが、これとは異なる納骨形態を明らかにできたことはきわめて大きなことと評価したい。

また、高野山における納骨信仰の変容については、山内の子院の一つの明王院境内に奉安されている一石五輪塔に最も退化した傾向を見出すことができたので、その一群の一部について調査する機会を得た。総数6000基ほど残存しているうちの約8.5%にあたる500基を調査できた。その結果、これまで知られている一石五輪塔の納骨形態が近世に入り込む可能性が高いことや、子院においても納骨を受容して供養を行っていたことを明らかにできた。この形式の納骨がどの時期に消滅し、何が現代まで納骨信仰を継続させたのかを課題であり、今後はその詳細について研究を行う意義を確認できた。

なお、これらの成果については『金剛寺木製小五輪塔調査報告書』、『明王院一石五輪塔調査報告書』として上梓し、関係機関、関係者への配布を行った。さらに両件とも同年開催の研究報告会で詳細を報告した。また高野山奥之院の納骨信仰については、高野山霊宝館で実施された「霊場高野山 納骨信仰の世界」展へ情報を提供し、原稿の一部を書くなどの協力をしつつ、成果の一部を公開する機会とさせていただいた。

#### (C) 中世墓の破壊

中世後半期に目立つ城などの石垣へ石塔や石仏を転用する実態を把握して、中世墓の破壊行為を明らかにし、中世墓の終焉の様子を窺おうと計画し、「石造物の転用と中世墓の終焉」と題した研究会を平成26・27年度に各1回ずつ実施した。その成果として中世墓の終焉をより具体的に知るには、数多く転用されている一石五輪塔や小型の石仏などについて、発掘調査で出土したものだけでなく現在も各地のお寺や墓地で祀られるものまでを対象として、全国的な傾向を把握することにより各所で一律的に起こる中世墓の終焉の実態を把握できるのではないかと考えた。以後はこのテーマを中世墓の終焉と読み替え、16世紀頃を中心として大量に造営された石造物（一石五輪塔、小石仏等）の実態把握が急務であるとして、継続した研究会を実施した。平成27年度には山陰地域、28年度には関東と近畿・東海地域、29年度には四国と九州の両地域、そして最終年度となる平成30年度にはまず北陸地域で実態を把握したうえで、これらの各地域を総括的にまとめる形として、年度の終盤に研究成果報告会を開催した。またその資料集として『中世墓の終焉と石造物』を刊行した。

結果はより細かな地域色に彩られながらも、大きな傾向を把握することができ、無銘のために年代の判明しにくい資料は、共存関係からある程度年代の絞り込みが可能となることや、類似の形態の石造物でありながら石材供給地の違いで大きくその様相を異にする点を見出せるなど、興味深い諸事項が炙り出される結果となった。これらについては高志書院の協力を得て出版する機会を得ることとなり、現在各担当者ともども研究会の成果を踏まえて再検討を行っているところである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 17 件)

狭川真一、庶民墓の変遷と石工の成長、第 31 回浜田青陵賞授賞式、査読無、岸和田市・岸和田市教育委員会・朝日新聞社、2018、PP.44～52、

狭川真一、中世武士の墓と近世大名墓、第 10 回大名墓研究会～近世大名墓研究の到達点～、査読無、大名墓研究会、2018、PP.93～100

狭川真一、江戸時代の墓と石造品、明石の近世、査読無、明石市立文化博物館、2018、PP.1～6、

狭川真一、大名墓成立事情考 高島藩主諏訪家墓所の検討から、石造文化財、査読無、第 10 号、石造文化財調査研究所、2018、PP.1～10、

狭川真一、中世都市奈良の宗教環境、「宗教都市」奈良を考える、査読無、山川出版社、2017、PP.69～93

狭川真一、兵庫城跡出土の転用石造物について、兵庫津遺跡 第 62 次発掘調査報告書、査読無、神戸市教育委員会、2017、PP.209～212

狭川真一、都市奈良を護る宗教環境、中世都市研究会奈良大会 2016 資料集、査読無、中世都市研究会奈良大会実行委員会、2016、PP.31～42

狭川真一、高野山奥之院における東海の大名墓、第 8 回大名墓研究会、査読無、大名墓研究会、2016、PP.66-73

狭川真一、日本における 10～12 世紀の墳墓、東亜都城和帝陵考古 契丹遼文化国際学術研究会論文集、(中国語掲載：山口早苗訳) 査読無、科学出版社、2016、PP.412～418

狭川真一、高野山奥之院出土納骨器の新資料、亀井明德氏追悼・貿易陶磁研究等論文集、査読無、亀井明德さん追悼文集刊行会、2016、PP.108～116

狭川真一、転用石造物にみる宗教観、寺社と民衆、査読無、第 12 輯、民衆宗教史研究会、2016、PP.1～7

狭川真一、納骨信仰遺跡研究の現在、季刊考古学、査読無、第 134 号、雄山閣、2016、PP.14～16

狭川真一、石塔の造立と納骨信仰、季刊考古学、査読無、第 134 号、雄山閣、2016、PP.21～24

狭川真一、高野山奥之院納骨信仰の流れ、弘法大師と高野参詣、査読無、和歌山県立博物館、2015、PP.58～59

狭川真一、有馬家墓所の石塔について 国元・江戸・高野山、久留米藩主有馬家墓所、査読無、久留米市教育委員会、2015、PP.116～122

狭川真一、奉籠孔を持つ木製卒塔婆、歴史考古学、査読無、70 号、歴史考古学研究会、2014、PP.27～31

狭川真一、中世武士の墓の終焉と高野山大名墓の成立、近世大名墓の成立、査読無、雄山閣、2014、PP.12～29

〔学会発表〕(計 4 件)

狭川真一、中世武士の墓と近世大名墓、第 10 回大名墓研究会、2018

狭川真一、大和の様相、第 9 回中世葬送墓制研究会、2017

狭川真一、高野山奥之院における東海の大名墓、第 8 回大名墓研究会、2016

狭川真一、都市奈良を護る宗教環境、中世都市研究会奈良大会、2016

〔図書〕(計 2 件)

狭川真一(編)、季刊考古学 中世の納骨信仰と霊場、第 134 号、雄山閣、2016、p120

藤澤典彦・狭川真一、石塔調べのコツとツボ 図説探る 撮る 測るの三種の実技、高志書院、2017、p200

〔産業財産権〕  
出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：  
ローマ字氏名：  
所属研究機関名：  
部局名：  
職名：  
研究者番号（8桁）：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：山口博之  
ローマ字氏名：YAMAGUCHI Hiroyuki

研究協力者氏名：松井一明  
ローマ字氏名：MATSUI Kazuaki

研究協力者氏名：北野隆亮  
ローマ字氏名：KITANO Ryusuke

研究協力者氏名：齋藤 弘  
ローマ字氏名：SAITO Hiroshi

研究協力者氏名：竹田憲治  
ローマ字氏名：TAKEDA Kenji

研究協力者氏名：濱野浩美  
ローマ字氏名：HAMANO Hiromi

ほか多数。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。